

388

特 252

840

納本

北支概觀



目次

- 第一章 北支の地理的概観
- 第二章 北支の人種と民族性
- 第三章 北支政局の變遷
- 第四章 北支の經濟的概観

昭和十三年七月

(陸軍認可濟)

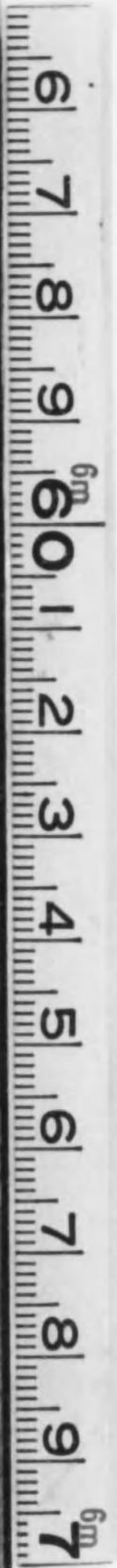
帝國在郷軍人會本部



38

4

始



特252
840

第一章 北支の地理的概観

一、地 域

北支那と稱する地域の範圍に就ては、地理上から觀るものと行政上から見るとに於て相違があり、或は北支六省と稱し、或は七省と云へ、八省と唱へ、區々として一定しないが、こゝでは昭和十年北支事變以來所謂北支那五省と稱せらるゝに至つた河北、山東、山西、察哈爾、綏遠の五省について記述することとした。

併しながら、將來も依然右の五省を以て行政區劃とするが、或は更に河南、陝西、甘肅を加へるか、或は又黄河以北を以て北支と定めるか、隴海線以北を以て區劃するか、それは今後の政治工作の具體化、軍事的効果の程度、國防上産業上の見地等から、決定せらるゝこととなるであらう。

二、地 勢 概 況

北支の地勢を要言すれば北嶺山系以北の黄河水系の流域であつて、即ち南は崑崙山、秦嶺伏牛山、淮山等の一連の山脈に

よつて中支那に界し北部はアラシヤン（一名賀蘭山）陰山等相聯繫せる陰山山系を以て蒙古に連り、その間黄河の巨流を以て之を貫き、この他支流として渭水、汾水、洛水、永定河等の諸流を有し、大運河も此の間に連絡して居る。

北支那の地形は大體に於て西部山地、北支那平野、山東山地の三つの地區に分つことが出来る。

西部山地帯は大體高原の地貌をなし、高低起伏せる山脈地帯より成つてゐるが、平地の重なるものは北部山西の大同、太原の南を流るゝ汾水の溪谷、南部山西の解州平野、其他渭水の溪谷等の平野である。此の内太原の盆地は直方形に近く、盆地内は沖積層で充たされ、太原以北及四圍の丘陵臺地は黄土より成り、盆地は豊沃で山西農業の中心地をなし、四圍の山地には石炭及鐵を藏し所謂山西炭田をなしてゐる。又大同盆地の西邊には大同炭田あり、南方渭水に沿ふ狭長なる西安盆地は沃土の平野で漢民族發祥の地である。

北支那平野は中原大平野とも稱せらるゝもので太行山脈以東渤海及び黄海沿岸に亘り黄河の下流に展開する大平野で北

京を頂點とし淮山脈を底邊とする二等邊三角形をなし、此の内に山東山地の介在するものがあるが、その面積は日本本州に匹敵する老なるもので、人口約八千萬を容れ支那の心臟部と稱せられ、又古代支那文化の淵藪をなした處である。

此の大平野は白河、黄河及び淮河の氾濫による堆積土より成り、殆ど凡てが黄土の堆積土により蔽はれてゐる。行政區劃より云へば河北省の大部分、山東省の西部、河南省の東部及び安徽、江蘇の北部を包含し面積三二四、〇三六方軒といはれてゐる。平野には丘陵の横はるものなく極めて低平で黄河が山間を出でて渤海に注ぐまで約五五〇軒、その間高低の差僅かに一〇〇米なるが故にその緩流なる推して知るべしである。

山東山地帯は北支那の別天地で地質時代には現今の北支那大平野は海中に没し波濤は山西の山々を洗ひ、山東山地は沖の島嶼をなしてゐたと云はれてゐる。山東省は山地及び平野の二區域に區劃され平野地帯は北支大平野の一部に屬し、山地帯はその東部に存し南は淮平野により淮山脈と分離されて

ゐる。中央山地、山東海岸山脈及び波狀地帯の三部に區分され、中央山地は支那五岳の一たる泰山を主峰とし、花崗岩より成る峨々たる山岳で海拔五、〇六〇呎に達してゐる。又山東海岸山脈は山東省の東縁を海岸に沿ひて走り北南兩部に分れてゐるが南部では青島の東にある嶗山が景勝地として著し、北部は峻峻な山岳帯で黄山、艾山等が著名である。波狀地帯は海岸山脈と中央山地との間に挟まれ一般に波狀の丘陵をなし斷層で圍まれた陷没地である。

三、黃 土

北支那の地形を特色付けるものは黄土の存在である。黄土の性質は、これを構成する粒子は細粒で大部分は淤泥に屬し、粗ひ岩石粒はなく、また粘土にも乏しい。この黄土の組織並にその多孔質構造共に水の流動を容易ならしむるために、水は容易に滲透し直ちに下部から上部へ上昇し、従つて粘土の如く水を濁し又は溜めたりする事がない。斯くの如く吸水力強きために黄土地帯には湖水が稀である。黄土は濕潤の時は粘質で可塑性であるが乾くと容易に粉末にすることが出来る

ため此の中に切り開かれた道路はその表面が洗ひ流されて峡谷を作り、大なるものは百五十尺の懸崖をなす。函谷關の如きはその一例である。山西、河南、陝西の諸地方では、かゝる峡谷に穴を穿つて穴居生活をしてゐるもの多く、約百萬にも達すると稱せられる。洞窟中は夏涼しく冬暖く、空氣乾燥して雨濕の苦は少ないが、此地方は東南亞細亞の地震帯に當り洞窟崩壊して多數の死者を出す危険がある。黄土は黄色又は褐色を呈し機械的成分は全く一様で常に二〇乃至三〇%の粘土と少量の砂を交へた淤泥で礦物學的成分は粗粒分及淤泥分の大部分は石英で非常に珪酸に富んでゐる。又化學成分は石灰、燐、加里分に富んでゐて甜菜、高粱等の成育には好適である。

四、氣 候

北支那の氣候的特性は、北アメリカの大西洋岸と共に海洋に面してゐるに拘らず、相當に大陸性氣候を示すことで、これは大陸の東側に見られる共通的の現象として、一般に「東岸氣候」と呼ばれてゐる。

これは大陸の西岸に位する同緯度上の地點と較べると明瞭に差異の著しいことが判るのであつて、北支那の冬季が極めて寒冷であるのに、夏季は殆んど大差なく、従つて氣溫の年較差が著しく大きい。夏季の氣溫は一般に同緯度の平均氣溫よりは幾分低溫であるが、冬季に較べるとその差は著しく小さい。けれどもところによつては過高を示す地域もあり、北京では七月の平均氣溫は二度四だけ高くなつてゐる。このやうに氣溫の上から見ると一般に大陸性が強く、従つて一年中の氣溫の變化が大きい譯である。

氣溫は我が内地に較べると著しく大陸性であつて、一日中でも一年中에서도變化が著しく、西方に進むに従ひ較差が著しくなり、又南下する程較差が少くなつてゐる。北京と略々同緯度にある我が内地の秋田との氣溫を比較すると、北京の氣溫の最高の月は七月で、平均攝氏二十六度四であるが、秋田の氣溫最高の月は八月で、平均二十三度八に過ぎない。この兩地の氣溫最高の月が異なるのは、秋田は海の影響が大きいが、北京の方は海の影響を殆んど受けなからである。又最

低氣溫の月は。北京は一月であつて、その平均は零下四度五に下るが、秋田では二月であつて、その平均氣溫は一度五に過ぎないのである。そして又北支那の白河は滿洲の遼河や滿鮮境界の鴨綠江と同じやうに冬季は氷結し渤海には流水があり、時には大氷原となり、又東海岸の青島港内にも薄氷が張ることも珍らしくないのである。

降雨量は一般に少く、比較的の雨の多いのは夏季であつて夏の三ヶ月に年降水量の七一%降り、冬季は極く少量である。一年中の總降水量は南部地方から北方に向ふに従ひ漸次減少し、黄河の沿岸地方では五〇〇耗内外で我が北朝鮮、樺太にも及ばない。又降雨量は東より西に向ふに従ひ漸減して行く。尙ほ略同緯度にある北京と我が秋田との降雨量を比較すれば、北京が僅か五六〇耗なるに秋田は一、八二五耗で、北京は秋田の約三分の一である。そして北京では七月が二〇〇耗を越えて最高を示し、それから漸減して冬季の降雨量は極く少ないのである。これは太陽が最も北に近付く頃揚子江流域地方に低氣壓が発生し、これが東方に進んで、北太平洋上に

占居するところの高氣壓に妨げられて本邦附近に停滯するため、日本では梅雨の現象を起すのであるが、北支那の南部ではこの間に豪雨を見ることがあり、又これと共に颶風による雨も多い。つまり北支那に降る雨は、この兩者に影響されるので夏季に降雨量が多いことになるのである。

風は北支那で特筆すべき、颶風と旋風は西方の内地から吹いて来る。そして又、春先には黄砂を運ぶ風が吹きまくる。これは東蒙古地方に起る猛烈な勢の北西風で、それが北支那へ向つて吹き下し、蒙古、北支那の乾燥した黄砂を運び、時には我が内地にまで達することがあり、天空が黄褐色となることも稀れではなく、黄塵萬丈といふ言葉で古から表はされてゐるほどである。

五、人口と面積

北支那五省の人口及面積は次ぎの通りである。

省 別	面積(方軒)	人 口	人口(一方軒)密度に付)
山 東	一五、七二	三、三六、八四九	三三
河 北	一四、五三	三、九〇、六九五	二七七

山西 一六二、八四三 一三、一五三、一三七 七五

察哈爾 二六八、八二五 一、九七〇、一五五 八

綏遠 三〇四、〇五八 二、一三三、七六八 七

以上のやうに、黃河流域を占める河北省及び海に直面してゐる山東省は、我國内地の人口密度一八一に比べて遙かに多

い。北支那で人口密度の高い所は農業地域である北支那平野でこの平野のうちでも北平、濟南地方が最も多く、西部山地は稀薄である。併し西部山地のうちでも、太原盆地は農耕地となつてゐるので人口は密になつてゐる。又山東半島は山塊が蟠踞してゐるにも拘らず、農耕地として土地が能く耕耘されてゐるので人口は比較的多くなつてゐる。

以上の通り人口過剰のため、山東省からは所謂山東移民として省外に出稼ぎ移住が行はれて、最近では益々それが激増し、芝罘、龍口はその門戸となり、龍口だけでも一ヶ年の輸送華工が十萬人に上るといふことである。又山の多い山西省も耕地が少なく、従つて人口過剰のため、山西商人として遠

く國外にまで出稼ぎに出る者が多いのである。

六、交通及び通信

北支那の道路は官路といはれ、古來南船北馬の言葉があるやうに、南支那は内陸水路に依り、北支那は主として陸路の交通が発達してゐる。そのうちで最も重要な幹線は北京から

山東省を過ぎ江蘇、安徽、江西の三省を経て廣東に向ふ廣東官路で、都であつた北京と外國貿易港であつた廣東とを結び我が國の東海道に當る道路で、昔時は往來頻繁を極めたものである。又山東省の德州から廣東官路に分れ、杭州を経て福州に出る福州官路があり、北京から湖北、湖南省を過ぎて廣西省に入り全州を通つて桂林に至る桂林官路もある。この他に北京からは滿洲熱河省の承德に向ふもの、山海關から滿洲の南部に通じるもの、蒙古の張家口に至るもの等が放出されてゐる。清朝の統治時代にはその他主なるものは十二本あつたとのことである。

北支那から蒙古に入る通路は張家口を経て庫倫に至るのを

重要とし、他の大部分は河川を利用してゐる。即ち最北部には白河があり、北部と西部方面は黃河の河原が重要な交通路にあつて居る。又山西省の中央を南北に流れてゐる黃河の支流汾河の流れに沿ひ、太原を通つて蒙古に入る道路もある。交通機關としては若干の鐵道と自動車交通もあるが、先づ大體は昔と變らぬ道路が重要な交通の役目をしてゐるのである。

尙ほ南船北馬の言葉のやうに、北支那の交通機關は馬を主

鐵道名	區	間	延長(杆)
京漢	北京	漢口	一、九四一
北寧	北京	山海關	九一二
津浦	天津	浦口	一、三六一
京綏	北京	包頭	一、一二六
正太	石家莊	太原	三八二
同蒲	大同	蒲州	六二九

是等鐵道はすべて國有鐵道といふ事になつてゐるがすべて外國よりの借款關係があり、自國で建設したことになつてゐる。

とし、驛がこれに次ぎ、西部山地では駱駝が使はれてゐる。

鐵道

支那の鐵道は一、八七六年の頃上海と吳松間に輕便鐵道が敷設せられたのを嚆矢として次第に發展し今や一萬杆以上に及んでゐる。

支那の鐵道は國有鐵道、専用鐵道、外國所有の鐵道に分たれ、軌幅は標準軌と狹軌とあり、正太、同蒲等の狹軌を除き大抵のものは標準軌である。左に北支に關する分を掲出する。

道清線	一九九、七〇〇を合併
備	考

榆次、大谷支線は同蒲線へ更に延長して潼關より陝西を横ぎり四川の成都まで連絡せしむる計畫
る京綏、隴海の二線でさへ後で外國資金を入れた。是等の中国に關係のあるのは北寧、京漢、京綏、膠濟の諸線で、殊

に膠済は世界大戦中日本管理の後華府條約に依り一、九二二年支那に還付したものと、投資に對する辨償は行はれず、其間運輸課長は日本人（鐵道省派遣員）をもつてせられる事になつてゐる。

専用鐵路は鑛山等の運輸を目的とせるもので傍ら旅客を便乗せしむる。軌幅は廣軌と狹軌及び輕便線も多少含まれてゐる。又外國所有鐵道は雲南省の滇越鐵道だけで、名義上佛支合辦となつてゐるが、實際はフランスの滇越鐵道會社の所有且つ經營で支那とは殆んど何等の關係がない。

尙ほ豫定線及び計畫線として左の如きものがある。

- 一、大同、張家口、北京間の線は勾配及び回半徑大にして山西炭及察哈爾鐵礦の輸送上不利なるを以て之を改修し、同時に北京、通州の鐵道を開平に接続せしめ秦皇島に延長し秦皇島、大同間の直通運輸を行ひ大同の石炭を海口へ搬出せんとするもの。
- 二、石家莊、滄州、太沽線を新設し、容易に山西南部の石炭を太沽に運搬する。

- 三、膠済鐵道を濟南より西へ延ばし河北の順德或は河南の彰德へ繋ぎ、青島港のヒンターランドを擴大する案。
- 四、察哈爾省の張家口より多倫、赤峰を連結して同省の開發及び滿洲國との交通を便利にする。

- 五、熱河——北京を新設して滿支の連絡を便にする。

- 六、綏遠省の包頭より五原を経て寧夏に延長し天津の背後地を西北へ擴大する案。

以上の諸案の實行には秦皇島、塘沽、太沽、天津諸港の改修擴張を伴ふことは勿論である。

航空路

支那の航空事業は日本より一步先んじて發達し一、九三二年僅かに三五四人の乗客ありしものが一、九三五年には一萬人を突破する勢となつた。同國にて空輸に従事する會社は中國、歐亞、西南の三航空公司以、此内西南公司是純支那人のみによつて設立されたものである。而して航空路は全部で十四線であるが其のうち北支にある定期航空路は次ぎの三線である。

北京——天津——青島——上海

この航空路は全長一、一七八軒で、所要時間九時間、一週一回の航空である。經營は米支合辦の中國航空公司である。

上海——南京——鄭州——洛陽——西安——蘭州

この航空路は全長一、八九〇軒で、一週一回の航空である。

これは南京——伯林連絡の豫定線中の支那領空内のものであつたが、新疆省の紛争のため變更され、バルカン、印度、シヤムを経由して支那と結ぶことになつたのである。經營は獨支合辦の歐亞航空公司である。

北京——鄭州——漢口——廣東

この航空路は全長二、二〇〇軒で一週二回の航空である。これも歐亞公司の經營である。

通信

北支那の郵便制度は一、八七五年にその端を發し、今では殆んど北支那全域に亘つて普及してゐる。又電信は天津と太沽砲臺との間に始めて電線を架設したのが一八七九年で、それ以後漸次發達して今では北支那全體に亘つて電信網が張ら

れてゐる。

又陸上電信の外に海底電線がある。これは支那所有の線と日本の經營に依る線とがあり、主なるものは次ぎの通りである。

日本所有線

- 1、旅順——芝罘——威海衛

- 2、青島——佐世保線

支那所有

- 1、芝罘——青島線

- 2、青島——上海線

- 3、上海——芝罘——太沽線

- 4、芝罘——太沽線

このうち1と2は舊獨逸所有の海底電信であり、その分布を見ると、芝罘が海底電線の核心と見られる。

ラヂオは北支那の通信機關のうちで特に發達してゐる。昭和二年天津廣播電臺で長波放送が開始され、北京には二十キロワットの北京放送局が建設された。續いて濟南にも放送局

が建設され、軍閥や政府の宣傳に利用されてゐた。現在では河北に十局、山東に四局、山西に一局あり外支人の經營である。天津、青島のやうな商業都市では民業經營で商業宣傳用にも使はれ、濟南、北京、太原等の政治中心の都市では省政府の經營で政府の命令、訓示等の傳達に用ひられてゐる。

第二章 北支の人種と民族性

一、概 要

北支那に於ける住民の多數は南方と同じく漢人種を主とする。そしてこれに蒙古人、滿洲人トルコ人が混る。西方には別に西藏種があるが、それは西藏高原に立て籠つて他と交通をしないこと、蒙古に於ける蒙古人よりも劇然たるものがある。蒙古人はもと喇嘛僧のみが少數西藏に留學したことはあるが、それ以上の交通はなかつた。

さればこの北方四民族のうち限地的に生活するものは蒙古族だけで、トルコ族及滿洲族は漢族と雜居し、滿洲人に至つては殆ど外見的には分らぬまでに漢人化した。但し蒙古人と

ても若干の雜居地帯はあるが、それは進んで南下したのではなく、漢人種が北進して農耕の生活をし、また蒙古人の若干が放牧生活から農耕への轉化の過渡的地帯、つまり塞外の新しい開放地帯がそれである。即ちそれは察哈爾及綏遠の中部を東西に引く線に於て漢人種との混合地が見られるだけである。何分にも蒙古人はなほ未開人種に屬し、特異の生活形態をもつてゐるから漢人化することは容易でない。

これに反し滿洲人及トルコ人は異つた二面を以て漢人種と混住してゐる。即ち滿人種は清朝が明を斥けて關内に入り北京に都を築むるに當り、直屬の旗人のみならず多くの人を關内に入れ、爾來清朝三百年、漢人を其の治下に收めたものゝ人種的には却つて滿人が漢人に同化せられて了つた。滿洲人の支那本部移住は京畿(直隸)今の北京を主とする河北省のみならず、山東の青州、陝西の西安、江蘇の南京、湖南の荊州、四川の成都、浙江の杭州、廣東の廣州さては熱河、綏遠、又は遠く西方の寧夏、新疆にも駐防軍が派遣せられてゐた。しかも今日に於てはその習俗の異なるものなく、孰れが滿人で

あるか漢人であるかは殆ど區別がつかないまでになつてゐる。然るにトルコ族に至つてはその居住は地域的に限られてはゐず、滿人のやうに消極的に混同したものでなく、進んで漢人集團の都邑に割り込んでゐる。衣服は漢人並であるが、

その生活は漢人種と異なり、宗教が拜火教の回々教によつて統一せられてゐること、漢人の好む豚肉を穢れとして一切口にしないこと、すべての事において漢人と對立的にあることは注目すべきである。蒙古人は西藏の如く城寨的特殊な疆域に立籠つてはゐないが、その古くから居住してゐた塞外の地は漢人の移住に依り、その南方盆地乃至高原は漢人の居住地區と化し、蒙古人は高原地帯及沙漠地帯に追はれ、或は自ら退いて相かはらずの放牧生活をして居る。蒙古人中少數の固定若くは半固定家屋に棲むものもあるが、それは前述の漢人種との接觸地帯のみに限られる。即ちこれを大觀して「北支那の主民族は漢族であつて、これに若干の滿洲族とトルコ族が混合し、察哈爾、綏遠の北部に於ては蒙古族が住居する」といふことになる。

以下少しく其等種族の沿革、特性、分布等に關し個々に就いて検討して見やう。

二、漢 族

漢族は普通に支那人と稱せらるゝ種族で、其の祖先は四、五千年以前黄河の上流地方より來り北支那に占居し、先住民族を征服し定住して農業を營み、城郭を築き、文字を作り、文學、哲學、藝術等を解し燦然たる文化を創造した。そして漸次中文、南支にも勢力を擴げて苗族を壓迫し、北方のツングース、西方のチベット諸族をも征服して其の版圖を擴め一面之等の種族の血を交へつゝ、今日の大をなし、全人口の約九〇%を占めてゐる。

この種族の特徴は偉大なる同化力で、たとへ武力により一時征服されることはあつても常に文化と經濟力とを以て同化せしむる。民國政府成立するまで三百年の間三億餘の漢民族を征服統御した清朝即ち滿洲族も何時しか被征服者たる漢族の文化に心酔同化して今日では殆ど區別し得ざるまでに融合して了つた。清朝の倒壊する以前、其郷土滿洲は既に山東、

河北方面より平和的に侵入した漢族のため、その住民一千六百万人中八、九割を占有される状態であつた。漢族は又大なる發展力を有し、滿洲のみならず蒙古、新疆、印度方面より遠く南洋、濠洲、南北亞米利加大陸へ移住し海外にあるもの五百萬と稱せられ、南洋の如きは支那人の南洋たるの觀を呈してゐる。

其の原因は身體強健で極寒極暑にも能く適應し、且つ廣漠なる大陸に養はれたため、國境の觀念薄く至る處何れも中華であり郷國であると考へ、忍苦財を獲て富を増してゐる。唯その短所とするところは、國家觀念に乏しいため國は常に亂れて悪政と兵亂に悩まされてゐることは同情に値する。

三、滿洲族

滿洲族はツングースの一分派で北支那では北京を中心にして河内、北徂に最も多く住し、内蒙古方面にも漢族と共に農工商に従事してゐる。ウラルアルタイ系のツングースが古亞細亞人種を逐つて南方から滿洲に移動を開始したのは紀元前二千年頃といはれてゐる。周時代の肅慎、漢時代の挹婁、隋唐時代の

靺鞨、宋以後の女眞は皆此の滿洲族である。愛親覺羅氏が滿洲族より起るや先づ同族を統一し、次いで東蒙古族と握手して國を建て、金と稱したが太宗に至つて國號を清と改め數百萬の滿洲族は數億の漢族を支配して四百餘州を支配した。しかし孫文一派の革命黨に滅ぼされる以前既に漢族に同化され、體質も風俗も殆ど區別し難くなり、姓も漢姓を用ひ、自己の言語すら忘れて祖先も漢民族を以て自ら許すまでに至つたが、近年日本の指導のもとに中華民國より獨立し、漸く民族意識を取戻しつゝある。

四、トルコ族

トルコ族はツラン系で、古人の所謂紫髯録の胡人で、匈奴、羯、突厥等の名稱で呼ばれたのは大體此の種族である。天山南路に最も多く、支那本部では綏遠省に多く人口約百萬中約一割を占め、漢族との間は面白くなく蒙古族と共にその將來は問題視されてゐる。

五、蒙古族

蒙古族は往古黑龍江の上流地方に住み、遊や金に服屬して

ゐたが、成吉思汗(元の太祖)出づるに及び現在の蒙古地方を悉く統一し、更に印度西岸より西部亞細亞、東部歐羅巴まで征服して廣大な帝國を作つた。また南は支那本部を版圖に入れ、遠く日本にまで延ばさんとして敗退した。現在は主として内外蒙古、トルキスタン、シベリヤ地方に住し人口約二百萬と稱せられる。

蒙古族は元朝崩壊後長城以北の故地に還り清朝に歸屬後は漢民族の壓迫により一層民族的衰亡の途を辿つてゐたが、清朝の崩壊と前後して外蒙古先づ支那の支配を脱し、次いで内蒙古東部の三盟及び呼倫貝爾は滿洲國の版圖に入り、残る内蒙古東二盟即ち察哈爾蒙古は民族自決に基く特別區の形態を整へつゝあつたが、今次の支那事變を契機とし愈々自治政府を組織し支那の支配を脱するに至つた。しかし蒙古民族全體が一體となつたのではない、外蒙古は共產主義に轉じて蒙古民國を結成し、内蒙古と明瞭に分裂を示してゐる。

六、在留歐米人及び日本人

支那には以上の外に外國人の居住するもの可なり多く、日

本人を始めとし、英、米、佛、獨、伊、「ソ」聯等の諸國人が在住してゐる。一九三三年末外務省の調査によれば北支五省に於ける外國人の在住者總數は三九、三七九人で、内日本人は二八、五四二人、外人一八、三七八人で日本人の數は外人の殆ど三倍に及んでゐる。此他南支那では日本人一二、五五三人に對し外人四、〇一七でその三分の一に過ぎないが、支那では日本人三一、二九九に對し外人四三、三三九で外國人の數が多い。

七、支那の民族性

支那の民族性の根本は個人の物質的幸福を追求する心情から發足してゐる。従つて國家中心の國民性といふ如き色彩は見出せない。どこまでも自己本位であり同族的であり同郷的である。集團生活には慣れ、よく周囲と調和はとれるやうに努力するが、それは君主とか國家とかを上を仰いで團結するのではなく、飽くまで平等思想、民衆思想に終始してゐる。故に有機的な國家の一員としての生活には幾多の脆弱性を暴露する。併しながらその反面には自力を恃み何等政府や國家

の助けなくして自治し得る自信を有し、又實際に於て兵亂、匪害、天災、地變相次いで起る中に困苦と窮乏に堪へ、孜孜として生業に勵み生命を維持し、財を貯へる努力には驚くべきものがある。今日支那民族が國家的には殆んど破綻しなから世界の隨所に經濟的發展をなし莫大なる富を獲得しつゝある所以も此の民族性の然らしむるところである。

面子尊重。支那人には一面に面子を重んずる特異性がある。功利的物質的で金のためにはすべてを犠牲にすると云はれてゐるが、必ずしも常にさうではなくて、その面目をつぶされ顔を臺なしにされる時程彼等の感情を刺激し騒ぐことはない。もとより面子の裏面には相當利害問題を伴ひ、直接間接損得に關係を有するにせよ、それにしても世間に顔出し出来ぬやうな羽目に陥られることゝなつたら最後死物狂ひとなつて、民族を擧げて騒ぎ立てる。此の特異性は國際間の交渉に於ても個人間の交渉に於ても十分に心得て置かねばならぬことである。

殘忍性。更に支那人に對して警戒すべきことは其の極端な

殘忍性である。善事をなして少しも鼻にかけず、陰徳を施して口外しない美點がある反面に非行、殘忍、酷薄目を蔽はしめぬ行ひがある。裏切者への私刑匪賊への復讐等には心膽を寒からしめる行爲をなして而も平然たる態度をとるは不思議な位で、今回の支那事變に對する漢奸に對する殘虐性の如きはその一端である。又驚くべきことはその罪に處せられる犯人自身が處刑に際して從容として死に就く態度も他國人には解し難き謎として屢々話題に上つてゐる。

享樂第一。支那人には裂しい享樂性の存することも特徴の一つである。これは功利主義者の當然の歸結ではあるが、酒池肉林の贅を盡すは支那人古來の風習であつて三千の宮女を春殿に侍らせし史實も稀でなく、現代に於ても家庭に第二、第三夫人を置いて肉慾を恣にし、又麻雀其の他の賭博類に耽り、或は阿片を嗜み、歌舞、管絃に感耽する如きは決して珍らしきことではない。

蓄財本能。享樂性の満足のため、不老長壽の域に生き延びるために、或は子孫の繁榮、官職を購ふためなどに支那人は

貯蓄心が極めて旺盛であつて、これこそ支那民族性の中樞をなすものといはれる。海外にある數百萬の華僑は皆この貯蓄することに成功することを唯一の願望としてゐる。そして貯蓄し得たる財貨は世相の不安と銀行の不信によりそれ／＼秘密の方法により家庭内の穴倉に或は山下老樹の下に壘莖を埋めて之を隠匿し秘藏する習性を有してゐる。

功利的社交術。次には社交性に長ずることも支那民族の特性的の一つである。教養のある士は勿論、無學の者でも人に對する愛想、言葉遣ひは極めて懇懇で、人の心を捕へ、如何に鬼心の者も骨抜きにされることは屢々である。話題に富み、喜怒哀樂の情を表はして人を釣り込み而も談笑の間に要領を掴んで巧に之を利用する術を心得てゐる。

宣傳上手。右に關聯して重要な支那の民族性は宣傳の巧妙なることである。これは日支外交上に顯著に現はれてゐることであつて殊に今次の事變に當り支那の宣傳戰の猛烈にして機敏なることは到底正直過ぐる日本の企て及ぶところでない、如何に世界の輿論を動かす上に役立つてゐるか計り知れ

ざるものがある。此の宣傳性は國際間のみならず國內に於ても文學に繪畫に寫眞に到る處に行はれ椽大の文字を掲げて辻に壁に隨所に公示する。商用の廣告にも自家の釋明にも政争の具にも極度に發揮され、之を職とするものあり相當の報酬が拂はれてなほ其の効果を現はしてゐる。古來支那には口舌の雄出でて縱横にその手腕を揮つた歴史を有してゐる。この支那民族性の宣傳性には十分の警戒と對策とを講ぜなければ甚しく不利を招ぐことは單に外交上のみならず個人の場合に於ても同一である。

悠揚性。支那民族性の中で直接自然の環境より得たるものは大陸的悠揚性である。無邊の曠野に生れ曠野に育つ支那人は實利的な煩雜性がある反面極めて悠久な無神經とも見られる性格を有してゐる。戰爭に例をとるも國家の存立を危くする様な大敗を喫するも比較的冷靜で神經質な國民の様に悲嘆も發奮もなく、來れる運命を甘受して動ぜざる暢びやかな性質がある。これは殊に北支那の住民に顯著であつて、島國的焦燥性を有する我が國民が北支に事をなす上に於て相當考慮

すべき問題であらう。

第三章 北支政局の變遷

一、清の支那統一

古來支那人が中國と誇稱し、或は天下に覇權を争ふことを「中原に鹿を逐ふ」と形容した如くこの中原を征服したものは、支那を支配することが出来たのである。即ち中原を舞臺とする興亡の歴史こそは支那五千年の歴史なのである。

而して中原とは南、河南省の伏牛山脈より北、恒山々脈まで、西、山西の太行山々脈より東、山東の泰山山系まで、南北六百哩、東西五百五十哩、總面積約二十萬哩に亘る北支那大平野をいふのである。而もこの大平野の中央を貫流するものは、その流域に無限の天産をもつ延長二千六百哩の黄河の奔流である。古來幾多の英雄が全支に號令しこれを支配するに先だつて、この地に政治的中心を置かんとしたことは、寔にむべなるかなと頷ぶられる。

かくて興亡五千年の歴史を経たる後、十七世紀の初頭、こ

—(一六)—

の中原をねらつて萬里の長城の東邊の一角から身を興した一英雄があつた。即ち清朝の太祖奴爾哈赤である。その後數十年を出でずして清朝の世祖は都を中原の北京に定め、これを基點として中原を掌中に收め、統治を南支に及ぼし、更に蒙古との聯繫を緊密にして、新疆、西藏を併合し、尙も數十年に亘つて北滿洲を脅かしてゐたロシアの勢力を驅逐してこゝに一大帝國を建設し、その帝業を持続すること二百餘年の久しきに及んだのであつた。

同じく異境の蒙古から起つた彼の偉大なる元が支那支配僅かに百年足らずであつたのに反して、滿洲より起つた清はその間阿片戦争や長髮賊の亂等幾多の内憂外患に襲はれながらもよく二百七十年の久しきに及んで帝業を保ち得た理由は、寶庫滿洲をその背後に持つたこと、漢人をよく理解して漢人の社會人心に基礎を置いた漢人本位の聖賢政治を行つたことのためである。然しかゝる滿洲の重要性を知り、滿洲人の支配的勢力を維持せんとして企てた滿漢權衡の制度は、これがために却つて、清朝の根柢をくつがへし、やがて清朝滅亡

の原因となつたのである。

かゝる間に日本の進出とロシアの再南下が開始され、こゝに滿洲を舞臺とする日、露、清三國の争鬪が展開されて、日清、日露の戦争となり、國の内外に於ける清朝の威嚴は地に墜ち、共和政治を要求する革命黨の蜂起となつて遂に清朝は漢人の倒壊するところとなつたのである。

二、革命後の南北抗争

斯くして第一革命による清朝没落後も、北支に於ては絶間なく軍閥の争鬪が繰り返された。北洋軍閥の始祖袁世凱の登場によつて、先づ南方同盟會との抗争が始められ、袁の皇帝即位失敗による憤死によつて第三革命の成功を見たが、やがてこれは安徽派の巨頭段祺瑞の出現を導き、その武力は絶えず南方を壓し國民黨との對立を深めた。然し同派に屬する安福俱樂部の徐樹錚の獨斷専行は、北方派に内訌を生ぜしめ、直隸派の曹錕及び吳佩孚は奉天派の張作霖と提携、大正九年の安直戦となり、安徽派は大敗し北方は直隸派の天下となつた。ところが安徽派の没落は新たに直隸派と奉天派との反目

となり、大正十一年と十三年との二回の奉直戦となり、第一回は奉軍敗れ、第二回は馮玉祥の寝返りとなり、北京クーデターによつて直軍が敗れた。茲に於て馮玉祥、張作霖、孫文をバックとして、各派勢力均衡の上に段祺瑞執政々府の組織を見、支那改造が目論まれたが、孫文の客死により南北兩派の關係が稀薄となり且つ國民黨急進派は廣東へ引揚ぐるに至り、再び馮、張の抗争が始まり幾度か戦争の危機に直面したが、奉天派内部に郭松齡の謀反起り、そのため奉天派の勢力は著しく削減せられ、反對に馮派の勢力は大に伸展したのである。

併しその後馮玉祥の左傾即ち國民革命軍加擔に對し、吳佩孚その他直隸政客の赤化法統運動及び張作霖と吳佩孚の提携等が結成されるに及び、馮玉祥は終に下野し、これに乗じて結成された張、吳、張宗昌、林景林等の討赤聯合軍は、馮系國民軍を掃蕩、北京を占領するに至つたが、南方より國民革命軍の進撃急なるため、吳佩孚軍は河南に、張作霖軍は南口方面に、孫傳芳軍は長江下流に夫々堅陣を布いて國民革命軍

を喰ひ止めることゝなつた。

北方戦に於ては閻錫山の協力もあつて張作霖軍の勝利となつたが、南方戦に於て吳佩孚軍の大敗となり、従つて奉天派は北方に覇を稱へ、江西より敗退せる孫傳芳の求援によつて張作霖は安國軍總司令に就任、孫傳芳、張宗昌、閻錫山は夫々副司令に任ぜられた。

併しその後北方派は革命軍のため壓迫せられ、その上閻錫山の革命軍参加等あつて、北方派の危機は目前に迫るに至つた。一方國民革命軍内に於ても内訌が起り、遂に分裂して共產黨は武漢政府を、蔣介石はこれに對し南京政府を夫々樹立したが、その後武漢政府も共產黨と手を切り、南京政府に合併した。

昭和三年國民革命軍と張作霖との間に決戦が行はれ、張作霖は遂に北京を去つて奉天に向つたが、不幸奉天驛頭で爆死するに至つた。かくて國民革命軍の北伐は滿二ヶ年で完成し東三省にも間もなく青天白日旗が翻へるに至つたのである。

三、反蔣運動の終結

北伐完成後の南京政府も依然として軍閥の寄合世帯であつたため、その後幾度か内訌を繰り返へした。即ち昭和四年の蔣介石と馮玉祥との兩度の衝突に次いで、翌五年には軍閥各派の間に反蔣戦線が形成され、閻錫山、馮玉祥、廣西派の外に國民黨左派の汪兆銘一派も加つて、北京に政府を造り、北軍は戦ひを極めて有利に展開させたが、洞が峠を極めこんでゐた張學良が蔣介石に加擔し、反蔣派の背後を衝いたので、反蔣派破れて蔣介石の覇權は確立した。

一方父張作霖爆死後滿洲を確保し、次いで反蔣派失敗後の北支に進出した張學良は一時頗る優勢であつたが、國民黨の革命外交を遵奉して極端な排日政策をとつた結果、日本との間に摩擦を生じ、且つ父子二代に亘る虐政によつて滿洲住民三千萬の怨嗟的となり、遂に昭和六年滿洲事變によつてその根據地滿洲を失ひ、つゞく日本軍の熱河討伐によつて北支をも追はれ、蔣介石の勢力は完全に北支までも及ぶことゝなり、一方には滿洲國の成立となつた。

かくて滿洲事變は北支の政治的、軍事的意義を更らに重大

なものたらしめたのである。即ち滿洲國と南京政府とは長城一重を隔てゝ接觸することゝなり、南京政府の國內統一が進捗すればする程その反滿抗日政策の具體化は日本支兩勢力の對立を屢々爆發線上に置いたのである。

日滿條約によつて滿洲國の國防及び治安維持の責任を分擔する日本として、かゝる狀勢を默視することが出來ず、驟然起つて滿洲國邊境の匪賊討伐に當り、熱河戦、長城戦となつたのである。

結局北支に於ける政局に決定的な變化を與へたものは滿洲事變とこれに續く長城戦とであつて、この事件で齎らされたものは停戦地域の設定、北平政務整理委員會の組織、北平軍事委員會分會の設置並にこれによる中央勢力の浸潤と雜軍の屏息とであつた。

四、北支特殊政權の出現

北支の政局は塘沽停戦協定、梅津何應欽協定、土肥原秦徳順協定の成立によつて、劇期的變化を生じた。塘沽停戦協定の實施區域には冀東防共自治政府が生れ、他の二協定の實施

區域には冀察政務委員會が出來、こゝに多年の懸案を一應解決したかの如き外觀を呈したのである。

この二つの特殊政權が生れるまでのこの地方の政情は頗る不透明なものであつた。何應欽が北平軍事分會委員長として軍事を擔當し、續いて知日派の黃郛が北上して北平政務委員長として政務を總攬してゐたが、舊張學良系の于學忠が大軍を擁して平津一帯に蟠居し、ことごとく反滿抗日の態度をとつてゐたのである。

併し梅津、何應欽協定で軍事分會、政務整理の兩委員會が撤消され、于學忠系、中央系の軍隊は悉く河北省外に放逐され、こゝに新しい政權誕生の礎石を置いたのである。

かゝる間に南京政府の銀國有令その他が原因となつて、河北省民の自治要求運動が旺となり、その氣運は綜合せられ二條の主流となり、一は殷汝耕を中心とする冀東防共自治政府となつて南京政府と絶縁し、宋哲元は河北、察哈爾に據つて冀察政權を造つた。そして山西、綏遠は南京政府の手に入り山東は不即不離の態度をとつた。

要するに冀東政權は別として冀察政權は日本と蒋介石との間に挟まれ、兩勢力の動き次第で右にも左にも轉がる性質のものであつたが、果して西南問題の解決、幣制改革の一段落以來、國民政府の壓力は統一運動の進行と共に強化し、その色調は次第に中央化した。

中央の壓力が加はるにつれ、當初冀察政權に與へられた廣泛な自治權も日一日と縮小され、日支航空の成立、日支合辦の天津電業公司の設立等日本に接近するかに見えた初期の傾向は月日と共に次第に色褪せ、却つて排日的策動が目に見えるやうになつた。藍衣社や共產黨員はいつの間にか潛入して、教育機關や軍隊にまで喰ひ込み、あらゆることが宋哲元の力ではどうすることも出来ない情勢に立ち至つた。かくて排日意識に燃ゆる二十九軍が「諸約違反」を敢てして、遂に今次の支那事變を惹起するに至つたのである。

五、地方自治政權の簇出

今次の事變下の眞只中に宋哲元が失脚下野し、冀察政權が事實上倒れたため代つて新たに地方的な自治政權が各地に生

れるに至つた。

蒋介石は冀察政權の樹立以來、陰に陽にこの政權の切り崩しを策し、殊に昨春以來いよ／＼積極的となり、津石鐵道敷設契約、東京—天津間の連絡飛行實施等に關し眞向から反對し、或は中央軍の變裝である税警團の山東侵入等をなさしめたのである。従つて宋哲元が今次事變の勃發に際し、日本側と蒋介石との板挟みとなり、遂に北平を脱出して下野するに至つたのは、如何ともなし難い歸趨であつたと云へやう。

冀察政權の崩壊後北平には北平自治委員會天津には天津治安維持會が七月殆ど同時に成立し、九月には察哈爾省に察南自治政府を樹立したのを始めとし爾後皇軍の戦局の進展に伴ひ各地に治安維持會が簇出して、夫々各地の治安維持、其他行政事務に任ずることゝなつた。

一方今次の支那事變發生以來、我が軍の察哈爾綏遠作戦に協力せる内蒙軍は、聖地百靈廟を奪還し、綏遠省城に迫るや久しく南京政府の重壓に憊まされてゐた内蒙古民族の蒙人自治主義の叫びは決河の勢ひを以て甦つて來たのであつた。や

六、中華民國臨時政府の成立

北支に發生せる今次の事變は更らに中支方面に擴大せられ忠勇無比なる皇軍の武威は忽ち江南の野を席捲し遂に昨年十月二十三日南京が完全に陥落して蔣政權は急轉直下一地方政權に顛落したのを機會に、十二月十四日午前十時を期して北京には新たに中華民國臨時政府が樹立された。

これはかねて事變後民衆によつて産聲を擧げた北京、天津、河北、察南、綏遠、晋北、山西等各地方治安維持會、自治政府及冀東自治政府等を打つて一九とし、これを基礎として全支の統治機構たらしめんとするのである。勿論「臨時政府」であるから正式政府樹立に至る一種の過程的政權とも觀られるが、然し單に局限せられた地方政權ではなく、やがて全支に於ける政治の樞軸たらんとするところに其の遠大なる理想と卓越せる抱負とを見るべきであらう。

これによつて多年南京政府や地方軍閥その他英ソ列國の傀儡によつて搾取却略を受けて來た支那民衆はこゝに更生の黎明を迎へると共に、將に全支に伸びんとした赤色の魔手を防

がて綏遠、包頭の兩要地陥落するや、民衆の獨立運動は一層激化し、遂に從來の蒙人自治主義を更らに高めて五族協和政

治による王道樂土の建設に邁進することゝなり、年號を成吉思汗紀元七百三十二年と改め、南京政府より完全に分離獨立し、青天白日旗を棄て、蒙古旗を掲げることゝなつた。

斯くて彼等五百萬の蒙古民族が永い間夢の間も忘れ得なかつた「大蒙古帝國」は五族協和の新形式を以て實現されたのである。而して新政權を具體的に決すべき蒙古民族代表大會は十月二十七、八、九日の三日間、内蒙古各盟主王侯代表五百餘名列席の下に、歸綏市公會に開催して新政權の名稱を蒙古聯盟自治政府と決定した。

越えて翌十一月には蒙古聯盟自治政府は察南自治政府及び山西省大同に成立した晋北自治政府と共に蒙疆方面に於ける利害休戚を同ふし若しくは相關聯する重要事項に關して緊密なる協議統制を加ふることの必要を認め、蒙疆聯合委員會なる名稱の下に三政府の聯合會を構成することに決し、茲に蒙疆聯合委員會なるものが成立したのである。

止して全文の悠久なる和平を建設せんとする礎石を確立したのである。

右の如き意氣の下に臨時政府成立の典禮は、十二月十四日由緒深き居仁堂に於て嚴肅に舉行せられたが、その新生臨時政府の成立宣言は次の通りである。

宣言

國民黨政柄を竊擧して民衆を蹂躙する事十有餘年、災禍淪りに臻り稅歛苛細、内に民生を剝奪して虐政相隨ぎ時に大地日に崩れ反復して共黨を容納す、倒行逆施社稷の將に顧覆する事を顧みず、猶且恬として恥を知らず、共黨の唾餘を拾ひて「黨權は一切の上に在り」の邪説を唱へ國家を私す。遂に魯を隣邦に構へ同種相食む、口に焦土抗戰を呼號するも百戰百敗數月を経ずして國都を喪ひ省市の半數を喪ふ。夫既に内容の朽腐を知らば、何すれぞ輕卒に干戈を動かすか、又既に戰備十年にして如何して斯くも脆きや。頻年國防を名に託して消耗せし金錢幾十億に達するや測り知るべからず、若し正途に用ふれば、斯かる摧枯拉朽に至ら

ざるべし。然もその大部分を著服せし事審核を俟たざるも明かなり、彼等は廉潔を標榜すれども實は金を外國に運びて名を化して儲金をなしあること公然の秘密なり。又正義に廉恥を唱道するも魑魅魍魎なるものは白晝公然に出で要路を盤踞し綱紀を蕩然せしめ、加ふるに公論を撲滅し黑白を顛倒し、廣く狂犬を飼ひ正人を狙殺せし事十餘年以來の事實たり。今や首都既に喪ひて倉皇として逃遁し、自から收拾すること能はず、同胞の生命何處に託せんや、茲に同人相謀りて中華民國二十六年十二月十四日北京に於て臨時政府を樹立す。志は民主國家を回復し汚穢なる黨治を洗濯するにあり、絶対に共產主義を排除するにあり、東亞の道義を發揚し民生を向上するにあり、權責を制定し中外相安んぜしむるにあり、凡て従前政府の對外事務にして既に國民に公にしたるものは吾人之に代つて一切の義務を負ふ。萬惡の國民政府宜しく容共の非を悟り、民衆を瞞せし罪を陳謝し、又引責下野して人民に政權を還すべし、若し頑として大言壯語なほやめずして、その罪を被はんと思はゞ隨

況の禍は許容すべからざるものあり。以上の如き國民黨の政策悉く誤りなるも國民黨中にも老成積望の士に乏しからず、吾等と同じ心理を有するものあり、吾人は初めより區域分別の見解を有せず、諸公光臨せられなば共に大局支持に當らんとす。要するに東亞同志なるが故に決して排斥する意義なし、天下公器なるため一黨一派の壟斷を許さず、區々たる心は天日に誓ふべし、同人は世變に飽經し、垂暮の年にて何等の企圖なし、但し中國人として驅僧の手より祖國の斷興する事を見るに忍びず、故に暫し立ち上りて大難を冒してその所信を遂行するものなり、近き將來に於て國家の政治軌道に復歸すれば、吾等は相携へて郷里に歸るべく茲に宣言す。

中華民國二十六年十二月十四日於北京

中華民國臨時政府

七、中華民國臨時政府の組織大綱

臨時政府は議政委員會、行政委員會、司法委員會の三委員會を以て組織され、各委員會は政府主席の下に立つ獨立的三

機關として設置される、政府主席は當分空席とし近き將來に於て正式政府の編成とともに設置することとし、取敢へず過度的に臨時政府とする。三委員會の職能、構成委員は左の通りである。

議政委員會

一、職能 國家の重要政策其他政治一般の審議機關として國策の重要問題は悉くこの三委員會の決定を以て行政に移される。併しながら議政委員會は行政委員會の行政實施に干渉容喙をなし得ず、専ら議政機關として独自の彈力ある機能を遂行する。

二、構成 委員長、常務委員、普通委員を以て構成され、常務委員は五名、普通委員は取敢へず二名として今後逐次増加することとし合議制度である。

行政委員會

一、職能 行政全般の實施機關として議政委員會の決定事項を實施する。

二、構成 委員長の下に秘書廳、行政部、治安部、文教部、

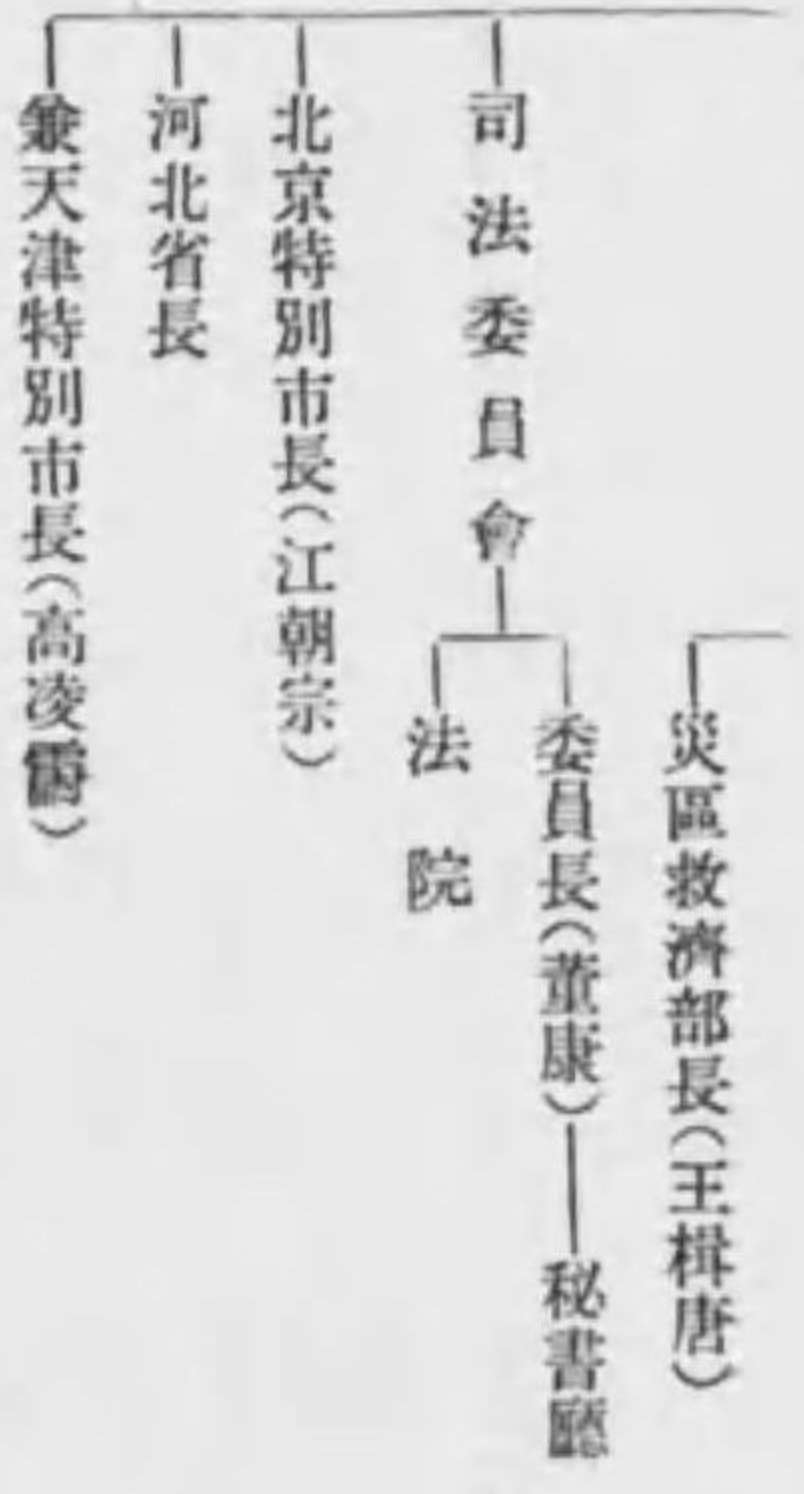
法制部、災區救濟部の五部より成る、今後漸次整備充實を
 圖ること、し必要に應じ部門を増設する。
 行政部は治安、文教、法制以外の一切の行政部門を擔當す
 る頗る廣汎なる職能を有する。
 法制間は今後政府の根本組織に關して研究を行ひ草案を決
 定する。
 災區救濟部は災禍を被りたる地方並に大洪水の被害を受け
 たる各地方の救済のため特に設置されたものである。
 司法委員會

一、職能 司法を擔當する獨立機關として議政行政兩委員會
 に對立する。
 二、構成 秘書廳、法院から成り秘書廳は司法事務を掌る。
 地方自治大綱
 一、新國家の組織は中央集權とし各省を統轄して省長を任命
 して行く方針であるため所謂各省の自治を基礎とする聯省
 自治の制度とは根本的に異なる。
 二、北京、天津兩都市は中央政府直轄の特別市として省政府
 の支配を受けず。

中 華 民 國 臨 時 政 府



時 政 府



八、冀東防共自治政府の解消

昭和十年十月香河縣に起つた農民運動は北支に於ける民衆
 自治運動の烽火となり、同年十二月には冀察政府と相前後し
 て河北省東部の一角に殷汝耕を長官とする冀東防共自治政府
 が成立し、こゝに完全に南京政府の羈絆を脱したのである。
 その管轄區域は河北省東部の所謂非戰地區即ち塘沽停戰協
 定に基く十八縣に、その西に續く準非戰區域四縣を加へた二
 十二縣で總面積一萬五千方哩、人口約六百萬を有する。而し
 てその施政方針は防共自治を標榜して「赤化の防止に努力し、
 積極的に語政を刷新し、實業を興し、以て財産を豊にし、共

匪を防ぎ無辜の人民をして安居樂業を得せしめ、模範政治を
 實現するにある」と宣言した。
 爾來同政府は親日滿政策を執りその施政見るべきものがあ
 つたが、昭和十二年七月七日突如勃發せる今次事變の進行中
 七月三十日同政府保安隊が通州に於て鬼畜の暴虐を行ひ、吾
 同胞多數を殺害したことは、吾國民の永久に忘れ難き痛恨事
 である。そのため長官殷汝耕は拉致せられ、政都通州は暗黒
 に陥り、民心恟々たる有様となつたので、遽かに秘書長池宗
 墨が代つて長官に就任し政都を唐山に移した。その後皇軍の
 武威により北津一帶は平穩秩序ある状態となつたので、冀東

政府の治安も舊に復し、今後一層の進展を期待せられたが、昨年十二月中華民國臨時政府の樹立を見るに至り、冀東政府は首脳部協議の結果臨時政府に合流することに方針を決定、直ちに同政府の解消準備に着手すると同時にその旨臨時政府に通電し、次で本年二月冀東政府は、臨時政府との間に完全に合流を實行した。

第四章 北支の經濟的概観

一、北支經濟の疲弊

一口に云つて、北支一億の民衆は驚くべき程に疲弊困憊してゐる。これには幾多の原因が交錯して存在するが、先づ第一は政治的缺陷である。北支は依然として封建的、原始的な地方軍閥と官僚の重壓下にあつて、苛酷な軍費と租税の徴發搾取に苦しめられ、衰退するに委せられてゐたのである。次ぎは經濟組織の幼稚である。現在北支産業の中核をなし、極端な獨占的利益を貪つてゐるギルド制が産業の發達を妨げて來たことは勿論で、かくて生じた經濟文化の低劣さは、南方

資本の北支進出となり、その植民地的搾取に甘んじなければならなくなつたのである。その上、交通通信機關の不備や貨幣度量衡制度の紊亂不統一がその經濟的發展の障礙となつたことも確かである。更に滿洲事變によつて生じた異常な人口過剰の問題も北支中心區域に於ける惱みの種となつた。一平方軒平均二五〇人に相當する人口密度を有する河北平野に於ては農民は辛うじて鹽の代金と租税とを納めるだけで、生活程度を更に低下する以外に生きる方法を知らない状態にある。

また、世界經濟恐慌と銀價の昂騰によるデフレーションがこれら植民地的桎梏下にある農民を如何に急激に窮迫せしめたかは、恐慌以來天津貿易が輸出入とも半減したことによつても察せられる。その他「中國を禍すものは黄河なり」とて軍閥や匪賊よりも恐れられてゐる毎年の如き黄河の氾濫による天災や低級な農産技術等の内部的原因も數えることが出来る。

石炭や鐵や鹽や棉花や等々の他に、それら無限の資源を擁

する地域に呻吟する農民の姿をも、我々は北支の地圖から讀み取らねばならぬ。

二、北支の經濟的意義

四十萬方哩の廣大な地域と八千三百萬の人口を擁し、地味肥沃、礦物資源にも富む、つまり自然的地理的のあらゆる條件に恵まれた北支五省は、政治のよろしきを得ばその前途は洋々たるものがある筈である。殊に、日・滿・北支の三角的プロツクが確立して、革新的開發にのり出したならば、恐らく急速にその面目を一新するであらう。

そこで、將來開發の土臺となるべき、北支の主要な資源、農産物等につき、概括的に説明することとしよう。

三、重工業資源

石炭——北支の重要資源の一つで、その埋藏量は左表に示す如く、千三百億噸と稱せられ、全支二千四百億噸の約半ばを占め、これを内地、朝鮮、樺太の總埋藏量百九十億噸に比ぶれば、その資源の如何に尨大であるか、察せられる。

五省のうち、山西が石炭の寶庫と目され、特にその無煙炭

資源は壓倒的で全支埋藏量の八割以上に及んでゐる。

北支石炭埋藏量(單位百萬噸)

省	瀝青炭	無煙炭	其他	計	百分率
山西	八七、九一	三、四七二	二、六七二	三、七七一	五三・七
河北	二、〇八八	九一	二	三、〇七一	一・六
山東	一、六三三	三	一	一、六三六	〇・六七
察哈爾	四八七	七	一	五〇四	〇・三二
綏遠	三三七	五	三	四七五	〇・一七
計	九三、五〇一	三、五五三	一、六九五	一三三、七零八	一〇〇

かくの如く巨額の埋藏量を有しながら開發が遅々として進まないのは、資本や技術の不足、租税の重壓及び輸送機關の不備から採炭の搬出が敏活に行はれないこと等々がその主な原因である。これらの點に對しては、最近わが興中公司等に於て、炭礦の經營に乗り出すと共に、輸送機關としては石家莊——天津間をつなぐ津石鐵道等を目下計畫中で、將來北支石炭開發の問題は期して待つべきものと信ずる。

北支省別出發量

省	自一九三〇年 至一九三二年平均	一九三五年
河北	七一六萬噸 三六・七%	七七四萬噸 三七・七%
山東	三〇八	三五〇
山西	二五三	二七〇
察哈爾	二〇〇	一三〇
綏遠	六〇三	〇・三
計	一、三〇三	六六・八一、四二〇
全支合計	一、九五一	一〇〇〇・二、〇五五

ともかく、北支五省の出發量は一千四百萬噸の多額に上り全支の六九%を占める有様で、日本の重工業發展に極めて重

要な役割が期待されてゐる。

鐵——全支埋藏量二億乃至三億噸中、北支五省に於て一億三千萬噸を占め、察哈爾一省のみにも九千萬噸を産し、わが資本による共同經營が計畫されてゐる龍烟鐵鑛はこの察哈爾省に在る。本鑛は含鐵量五十七%の優良鑛で、埋藏量八千萬噸といふ全支第一の鐵山である。

省	埋藏量	北支内 百分比	全支内 百分比
察哈爾	九一、六四五	六六・五二	三八・六九
河北	三三、四二四	二二・五四	一三・六九
山東	一三、七〇〇	九・九四	五・七九
計	一三七、七六九	一〇〇・〇	五八・一七
全支合計	二三六、八五四		一〇〇・〇

(山西、綏遠の二省は不明である。)

北支の現在の全生産高は大體二十萬噸程度で、全支の一四%に過ぎない。採掘は多くは舊式土法によるもので、新式鑛山としては、山西省の保普公司のみである。

北支鐵鑛生産(一九三一年單位千噸)

省	新式生産	土法生産	計
北支	一一・二	一九三・四	二〇五・六
全支	九八七・三	四九五・八	一、四八三・一

鹽——北支に於ける鹽の生産は豊富で、全支産鹽量三、六〇〇萬擔中三〇%を占め、河北、山東の沿海地よりは海鹽、山西、綏遠からは湖鹽を産出する。湖鹽の生産量が海鹽に及ばないのは勿論だが、奥地の需要には充分である。

産地	自一九一九年 至一九三一年平均	百分比	一九三三年
山東	五、〇三〇	四五・九	九、三六五
花蘆	三、八一五	三四・八	五、九〇七
河東	一、七二九	一五・八	一、〇四二
晉北	一九三	一・八	三三〇
口北	一九一	一・七	二五
計	一〇、九五八	一〇〇・〇	一六、六六九
全支合計	三五、九五四		四三、三六五

支那では鹽の輸出を禁じてゐるが、山東に限り山東邊附の實際の協定により、一ヶ年最高三億五千斤、最低一億斤の輸出が行はれてゐる。我國に於ける鹽の年需要額は食用十二億萬斤、工業用十五億萬斤計二十七億萬斤に上る上、將來わが化學工業の發展によつて、益々需要の増加することは明である。現在は、關東州、埃及、アフリカ、青島等より輸入してその需要にあてゝゐるが、將來わが國の輸入鹽(特に工業鹽)として最も有望視されてゐるのは長蘆鹽である。

四、農業

北支の經濟は農業本位であるが、山西、察哈爾、綏遠三省と河北、山東二省とは自然的條件に著しい相違がある。即ち、後者は耕作本位で前者は牧畜の要素が多分に含まれてゐる。北支農業の概況を中國年鑑により表示すると次の如くである

省名	總戸數	農戸數	總戸數に對する農戸數の割合	耕地面積	水田	畑	農家平均當畝數
河北	四、九八三	四、二二三	八五・五%	一〇三、四三二	八、四六七	九四、九六五	二四
山東	六、六五九	五、九一八	八八・九	一一〇、六六二	二、三九五	一〇八、二六七	一九
山西	二、二六三	一、八七四	八二・八	六〇、五六〇	三、六二九	五六、九三一	三二
察哈爾	三九七	三〇九	七四・四	一六、八三九	一、八五五	一四、九八四	五四
綏遠	三六七	二四九	六八・〇	一八、六六九	一、四〇〇	一七、二三九	七五
合計	一四、六二一	一二、六一八	八六・〇	三二〇、一六一	一七、七四六	二九二、三八五	二四
全支	七三、九七七	五四、九二五	七四・〇	一、〇四二、五九五	二九九、三八五	七四三、二二二	一八
北支の全支に對する割合	一九%	二二%		二九%	五%	三九%	

(註) 田畑の畝は我國の六畝二合七勺即ち二百坪弱に當る。
 戸數より見れば、總戸數の八割六分は農業で、全支の七割四分よりも高率で、全支に於ける北支農業の位置は相當なるものがある。また、總戸數は全支の二割弱に過ぎないが耕地面積は約三割を占め、農業地帯としての黄河流域の重要性が裏書されてゐる。従て、黄河氾濫に對する對策が將來問題である。次に中南支の水田に對し、北支農業の中心は畑作である。更に作付状態を見るに、畑作地域だけにその作付が大半なるは怪しむに足りない。即ち次表の通りである。

北支農耕地の主要作付面積 (單位千畝)

省名	米作	小麥	高粱	粟	大豆	玉蜀黍	大麥	棉花	落花生
河北	六〇一	三、三六六	三、二六九	二四、三三〇	九、八〇四	一五、五三三	三、九四三	八、〇三七	七、七六
山東	一、六六	四九、六八八	三三、三三九	三二、一五九	五、九八三	三、六七〇	六、六二二	四、〇六	—
察哈爾	一、六四〇	一、六四〇	一、六四〇	三、三三〇	一、〇三五	四一八	—	—	—
綏遠	—	二、六七九	一、九七七	四、一〇九	—	五二	九七四	—	—
山西	三九	一六、五〇〇	九、八四四	一八、四四九	三、三四八	四、〇六五	二、三三九	一、七五三	六七
合計	一、二三四	一〇一、八四四	五、七三三	七二、三七四	四三、九八	三五、五五〇	一一、三九〇	一四、四二〇	六、九八九

(注意) 耕作面積につきては前表を参照されし。

北支の主要農産物は次表の如く、小麥、粟、高粱等の食用作物と棉花及び羊毛等である。

北支省別主要農産物産額表 (單位千市擔)

省名	小麥	粟	高粱	棉花	落花生	玉蜀黍	大豆	甘藷	花生
河北	四三、一〇八	三〇、八八四	二〇、七四四	—	—	三三、五三三	八、五五七	三、四二二	—
山東	一七、三三三	一五、九〇五	一〇、三三七	—	—	一六、六八五	七、六五三	四、五、一九三	—
山西	一七、三三三	一五、九〇五	一〇、三三七	—	—	一六、六八五	七、六五三	四、五、一九三	—
察哈爾	—	—	—	—	—	—	—	—	—
綏遠	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	七七、七七六	六二、六〇九	四〇、三九一	—	—	六六、九〇三	二二、〇二九	一二、〇七五	—

羊毛

四

三

七

七

七

世界産棉額の約一割を占めてゐる。

(三三三)

(註) 自一九三一年至一九三四年平均數量。

一市擔は五千疋に當る。

今、北支に於ける産棉状態を見れば左の如くである。(察哈爾、綏遠兩直には棉花の生産なし。)

棉花——支那は米國、印度に次ぐ世界第三の棉産國で、全

北支省別棉花植付反別及産額 (千支畝千擔)

省別	一九三三年		一九三四年		一九三五年		一九三六年	
	反別	産額	反別	産額	反別	産額	反別	産額
河北	六、三三	一、四五	七、八七	二、八六	六、三六	二、一六	一〇、四一	二、五〇
山東	五、三五	一、四九	五〇、四三	一、三四	一、八〇	四〇七	六、一一	一、九一
山西	一、三二	五〇三	一、七六	六〇一	一、〇六	三五三	二、〇七	四六
北支三省計	一三、七〇	三、四六	一五、〇六	四、七一	九、一四	二、八五	一八、六七	四、八七
三省の對全支割合	三・六	三・一	三・五	四・五	三・〇	三・五	三・一	三・四

但し一九三六年度分は棉作豫想を示したものの。

また、北支二省(河北、山東)の平均毎畝産棉量は二六斤で、之を全支平均二二斤に比ぶれば約二〇〇%多く、之を以て見ても、北支が全支中で最も棉作に適せる地帯であることが

分る。この一支畝二六斤の收穫率は反當り四三斤、エーカー當り二二三封度に相當し、埃及のエーカー當り四〇〇封度には及ばないが、米國の二〇〇封度、印度の一〇〇封度に比し

遙かに良い收穫率である。

米棉と土着棉——北支棉花には米棉種と土着棉種とがあり山東に於ては前者六〇%、後者四〇%、河北省に於ては前者三〇%、後者七〇%の割合である。土着棉は粗毛、米綿は細毛である、が米綿は收益に於て土着棉を遙かに越へ、且つ土着棉は一般の需要減退と對日輸出の激減のため米綿の栽培は漸く増加しつつある。

北支棉の開発と農民問題——近年北支の主要産物が市價の暴落により賣價が何れも生産原價を割つてゐる中で、棉花のみは相當の利益をあげ得てゐるから、困窮せる北支農村の救済に對しても棉花工作は重大な關係がある。元來、棉花の増産は單位面積に對する増收工作と栽培面積の擴張とによるものであるが、前者には自から限度があるので、主として後者によつて目的を達成することになる。そして、栽培面積の擴大は未開地の開發も勿論考へなければならぬことであるが北支に於ては、利益の少ない雜穀の栽培面積を之に變換することが簡單で而も有利である。そして、北支に於ける棉花増

植を圖り、その産棉を日本で購入し、そのために生ずる穀物の不足は日滿北支の經濟合作によつて、滿洲農産物を以て之を補充するやう三角的調整をすれば三方共好都合となる譯である。

かくて、北支の農業は、小麦、大豆、棉花、落花生等に於て、現在のところ自給して尙相當の餘力があつて、之を輸出してゐるが、一面他の必要品を他から輸入せねばならぬ立場にある。全體的に見て、中南支に比すれば市場依存度は低い、まだ自給自足とまでは行かない。

五、農民の疲弊

かくて河北の農民はその零細の地の故に北支各省の農民の疲弊と苦惱を集中的に表現してゐると考へられるが、その原因としては、

第一に、農産輸出の減退と市價低落があげられる。即ち輸出不振は他面滯貨を増して市價を低落せしめ、兩方から農民の收入を脅やかした。

第二に、北支の封建的諸制約が擧げられる。即ち地方税の累

増、不當な物産買付、高利貸の横行等が農村疲弊に拍車をかけた。

第三に、殆ど連年反復される黄河其他北支河川の洪水等の天災の繼續である。

以上の如き諸要因の複合によつて北支農村は今や深刻な解體的危機に直面してゐるが、他面それがために農村復興の聲も漸く大となつて來た。北支の農村復興は、大體資本主義化の方向と合作社の方向であり、特に後者の進出は著しい。だが、これらの間を縫つて陝北から赤化の嵐が吹きはじめてゐるのである。

六、農村の復興工作

前述の如く、北支に於ては封建的諸條件から來る慢性的な農業恐慌と植民地的諸條件から來る資本主義的恐怖の浸潤によつて、農村の疲弊はその極に達してゐるが、反面これがため農村復興の聲も大いに起るわけでもある。

この復興工作に於ても、植民地的條件から來る恐慌に對する對策即ち關稅又は爲替手段による國內消費品の市價維持と

か、積極的な貿易助長手段とか、國內消費品の輸出奨勵とかは、國際的にあらゆる支那的條件からの解放を要する問題であつて、その即時的實施には多くの困難を伴ふので、この農村復興も勢ひ内部的な封建的條件の解放にのみ餘が向けられるわけである。そして、これもまた農産品の質の改良とか、増産工作とかに限られるのである。そしてこのために具體化してゐるのが、合作社運動即ち協同組合運動であるが、これは畢竟協同組合をつくつて、政府と近代銀行とが、この組合を通じて各般の救済と復興方策を講じようといふのである。そしてこれらの多くは信用組合で、その他は生産組合又は共同販賣組合の如き形態をとつてゐる。

今北支に於ける各省の合作社及び社員數を表示すれば次の如くである。

社	社員數	
	一九三三年	一九三四年
河北	七、七五	一、九三五
山東	五、四四五	二、四七一
河南	一、九三五	三、〇五三
山西	一、九三五	四、〇八一
綏遠	一、九三五	一、四〇六
陝西	一、九三五	六、五三六

天津、上海の貿易額比較 (單位千元)

對内貿易	輸 入		輸 出		計
	一九三三年	一九三四年	一九三三年	一九三四年	
天津	六、六七〇	八、〇一五	一、七七一	一、七七一	一、七七一
上海	六〇〇、四八三	三、七三三	八七三、七六八	一、五七四、七三三	一、五七四、七三三
全 支	一、〇六、九七九	五、五五、七三三	一、五七四、七三三	一、五七四、七三三	一、五七四、七三三
對内貿易	移 入		移 出		計
天津	二、三、三五	五、〇〇〇	一、七九、九〇五	一、七九、九〇五	一、七九、九〇五
上海	三、四、四七〇	四、五三、〇三五	六、六、五〇五	六、六、五〇五	六、六、五〇五
全 支	一、〇〇、七三三	九、五三、三三三	一、九七、四一〇	一、九七、四一〇	一、九七、四一〇

即ち、對外貿易に於ては、總額に對し上海は五五・四二%天津は一一・二七%であり、對内貿易に於ては、總額に對し上海は三八・九三%天津は九・一一%である。

更らに金融について見るならば、その在銀高は最も明瞭にこのことが判る。一九三四年と三五年の各五月を例にとると次の如くである。

山西 七 一、九〇 四、五三 六、一七
綏遠 五 一、六 四、三 三、八
尙、この運動により、低利資金の關係から農村高利貸を驅逐し、共同販賣により不當中間商人を廢除することにはなるであらうが、合作社を通じて銀行を利用し得るものは農民のうち一部に過ぎないであらう。故にこれを以て、結局資本家的搾取の助成に外ならぬと批難するのも強ち故のないことではなく、更らに一步進めて大衆本位のものとし、近代銀行や大、中農のみの利益本位のものたらしめないやう進歩的な用意が必要であらう。

七、南方資本の北方進出

南北支那の經濟的相異——天津を中心とする北支と上海を中心とする南支の經濟状態を比較するとき、著しい差異のあることを發見する。貿易に例をとるならば天津のそれは上海の約五分の一に過ぎない。今、一九三四年の數字によつて比較して見るに次の如くである。

天津、上海の在銀高比較 (單位千元)

天津	一九三四年五月	一九三五年五月
上海	九〇、四〇八	三六、六六〇
天津	五九四、〇五六	三四〇、九四三

即ち、上海に比べ、天津は前者に於て約三分の一、後者に於て約九分の一であつて、甚しくマーケットの小さいことを示してゐる。

北支産業と官僚資本——かく天津が上海に比して著しく経済的に劣勢であるのには、地理的、政治的の理由はあらうがその貿易の不振が大きな原因である。積極的に産業的機能を發揮することの出来る所謂買辦資本が、貿易不振の天津では大規模に發生しなかつたのであるし、従つてこれによつて生ずる産業的開發も生じなかつた譯で、反對に租稅的搾取を對照として生れ出た軍閥的封建的官僚資本がこびりついてゐるので、その經濟的工作も現状維持的乃至は退嬰的で、結局退化と共に債務の膨脹となり競争力進出力を失つてしまつたのである。これが天津を従つて北支一帯の經濟發展を阻止したる有様である。

大きな其原因と云へる。

南方資本の進出——以上の如き事情が上海勢力即ち南方金融力の進出を導いたのであつて、試みに銀行について見ても従來天津市場を牛耳つてゐたのは上海系銀行であつて、土着銀行は全く之に壓倒されてしまつてゐる状態にある。即ち、現在天津にある主要支那銀行二十九行中、上海に本店を有するもの十六、天津に本店を有するもの九、北平一、その他三の割合で、上海系銀行が絶對である。今、銀行券發行支那銀行十二について南北を比較すると次の如くである。

南北銀行の發券額比較 (單位千元)

	(一九三四年五月)	(一九三五年五月)
上海系八銀行	四一、三二七	四六、三二一
天津系二銀行	一、四七〇	一、三三八
北平系一銀行	一一〇	二〇七
南北共同一	七、六五三	六、五九三
計	五〇、五七〇	五四、四五九

即ち、五千四百萬元の發券額中、四千六百萬元は上海系銀

行によつて占められるといふ有様である。その後北支事變(第一次)の影響を受けて、河北省銀行の發券が激増してきたとは云ふものの、南方銀行の壓倒的支配に變りはない。一九三七年一月現在の天津流通紙幣は總額二億一千四百萬元に上るが、そのうち、河北銀行の分は二千萬元に過ぎず、一億八千萬元以上は、上海系の中央、中國、交通の三銀行で占めてゐる有様である。

かうした状態であるから、北支に於ける産業開發、産業建設工作が、こゝ數年來南京政府の對日關係の悪化のため、殊更らに手控えられてゐたのは當然のこと、これは南京政府の最近の經濟建設工作案を検討すれば直に判ることである。即ち、鐵道、公路の建設はあくまで中支中心であり、西北建設にしても北支の中樞部は除外されてゐる。

北支六港と全支貿易額 (單位千元)

昭和七年	北支六港		全支	
	輸出	輸入	輸出	輸入
	一六三、三三三	三六四、四七七	六八、〇七七	一六五、五五六
	計		計	
	四三二、八一九		二四三、六五五	

かうした南方勢力の北支支配によつて、北支の經濟開發はいやが上に低調ならざるを得なかつたのである。

八、北支の貿易

銀高と貿易の低減——最近支那に於ては、對外貿易は極めて不振の状態にあるが、之は主として、各國の金本位停止に基く金計算貨幣の低落と銀の昂騰、更にこれが米國の銀政策に拍車をかけられて支那は著しいデフレーションの下に追ひ込まれ、銀高によつて輸出は停滞し、それを原因とする購買力の低下は輸入をも激減せしめた。

北支に於ては、この傾向の上に更に滿洲國獨立によつて有力な市場を失ひその打撃は一層激しいものである。左に北支六港の貿易について最近の情勢を示さう。

昭和八年	一五三、七七一	三〇四、六六六	三、五、九四七	六二二、三九三	一、三五八、九七八	一、九七一、七七七
同 九年	一三五、七八一	二六一、七六六	三、九七、五七七	五五五、七三三	一、〇三八、九七九	一、五七四、七三三
同 一〇年	一五九、六四四	一五〇、三三三	三、〇九、七七七	五、六、三九八	九二四、六九五	一、五〇〇、九九三
同 一一年	一九一、二一一	一四〇、九〇三	三、三三、〇四四	七、八、七九一	九四四、五三三	一、六五一、三三四

次に北支貿易の九〇%を占める天津及び青島に於ける主要輸出入品の内容を示すと、次表の如く、輸出は農産及び畜産品の如き原始品、輸入は工業品といふ植民地國の特徴を表してゐる。

豚 毛	五、一二五	化學藥品	三、六四一
葉 煙 草	五、〇六八	紙	二、九九〇
カーベット	四、〇七五	羊毛製品	二、四四一
穀	二、八六七	染 塗 料	二、三三〇

天津及青島二港の重要輸出入品内譯 (單位千元)

輸 出	輸 入	
毛 皮	鐵 及 銅	八、三六四
毛 類	石 油 類	六、八五六
棉 花	綿 布	五、四四八
落花生類	機 械 器 具	五、〇三五
加工卵	木 材	四、五六一
獸腸肉	砂 糖	三、七三二

北支の對日貿易——次表に示す如く、主として排日に起因する多少の消長はあるが、大體輸出入共五千萬圓より七千萬圓の間で、昭和十一年の如きは、夫々對全支貿易の三八%及び四五%を占めてゐる。將來は、今次事變による北支に於ける政治的變革により恐らく飛躍的發展を示すことであらう。

對北支貿易額 (單位千元)

昭和六年	北支	全支	北支	全支
同 七年	五、七四八	一四三、八七七	四七、六四三	一〇三、七四九
同 八年	七、五五五	二九、四七八	三、八三三	七、一五五
同 九年	五、二三〇	一〇八、二五三	四、〇五七	二、三、三三七

列強の天津貿易に占める地位 (單位百萬元)

日 本	一九三五年		一九三六年	
	金額	%	金額	%
英 國	九、四	三三、〇五	三、三	三、〇五
米 國	三、三	一〇、三三	一〇、三	八、八
獨 逸	八、〇	二六、八八	四、四	三、七九
其 他	一五、〇	五〇、七九	一〇、九	九、三〇
合 計	九二、〇	一〇〇、〇〇	一一、八	一〇〇、〇〇
日 本	一九三五年		一九三六年	
	金額	%	金額	%
英 國	三、三	三、〇五	三、三	三、〇五
米 國	三、三	三、〇五	三、三	三、〇五
獨 逸	八、〇	二六、八八	四、四	三、七九
其 他	一五、〇	五〇、七九	一〇、九	九、三〇
合 計	九二、〇	一〇〇、〇〇	一一、八	一〇〇、〇〇

こゝには、日本よりの輸入に於ては、正常輸入額のみを掲げたのであるが、之に冀東特殊貿易額を、一九三五年度八百萬元、一九三六年度七千六百萬元と内輪に見積つて、加算すると日本よりの輸入は一九三五年度四六・七一%一九三六年度六

瑞典	—	—	—	—
西班牙	—	—	—	—
計	九九五	四三三	一、〇三三	一七二

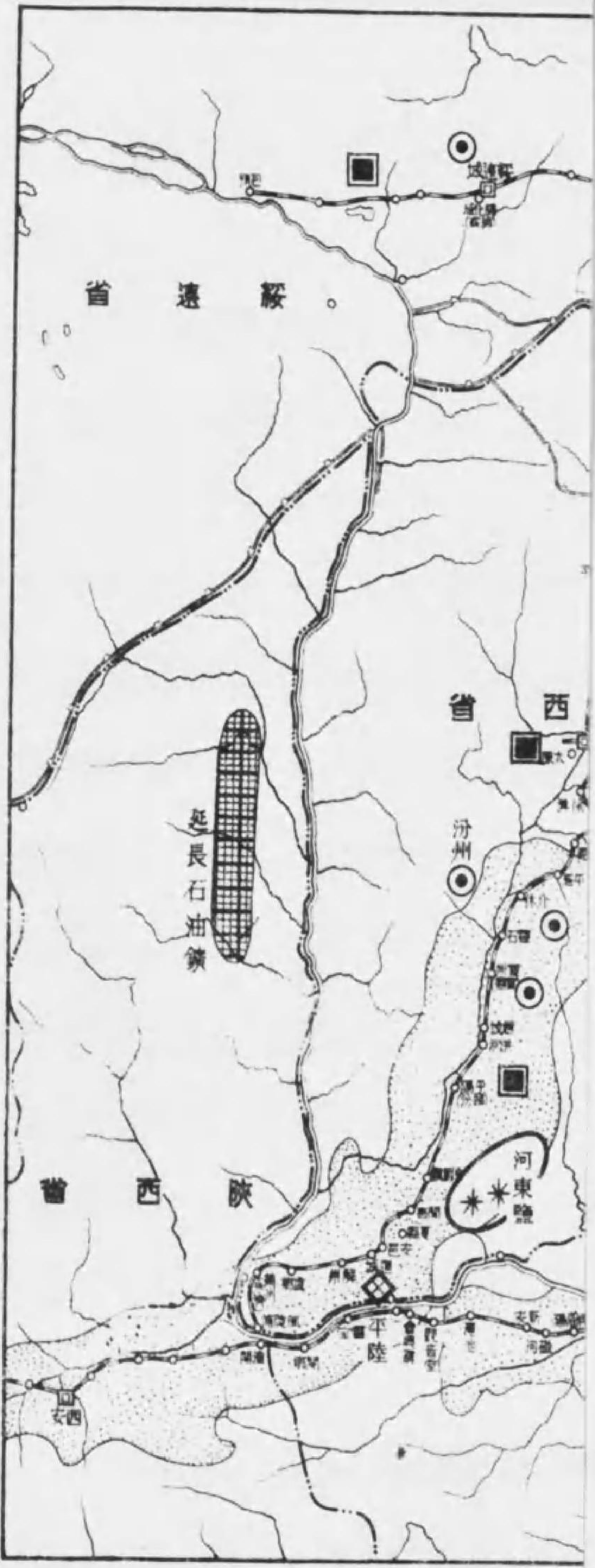
日本の對支投資——昭和十年六月「エコノミスト」の計算によれば、日本の對北支投資は左表の如くである。(單位百萬圓)

一、借款によるもの				
財政借款	一四二	交通借款	七六	
鐵道借款	一六四	軍事借款	一〇三	
實業借款	二四五	以上計	七三〇	
二、投資の形をとるもの				
山東省	一四〇	河北省	四三	
		以上計	一八三	
三、企業による投資				
青島に於ける紡績關係			五〇	
山東省マツチ、製粉、倉庫、榨油等			一五〇	
天津に於ける東拓の投資			三五	

北京に於ける正金、東亞興業、三井、三菱等	七
總計	一、一五五
以上計	二四二

冀東、冀察兩政權の樹立、北支特殊地域の協定以來天津を
目指し、わが各種企業の進出は目覚ましいものがあり、特に
紡績業の如きは各社の計畫完成の上は、八十萬錠突破が豫想
され、わが在支紡績の將來の中心は天津に移りつゝありと云
はれる程である。更にまた井陘炭鑛、龍畑鐵鑛の採鑛、津石
鐵道(二千五百萬圓、天津、石家莊間二八八軒)と太沽築港
(三千萬圓)の建設が着手若しくは計畫中に屬し、その他北
京、天津、濟南、青島に於ける無電線、興中公司与電力聯盟
の共同出資による天津電業、惠通公司による北支、大連間の
航空路の開通、更に山東省に於ける炭鑛投資の進出等々は最
も注意すべきものである。

要するに、わが經濟の北支進出は、今次事變の終決を待つ
て、一段の目醒しき進展を見ることは火を見るよりも明らか
で、その前途は洋々として盡きるものゝない感がある。(了)



昭和十三年七月十一日印刷
昭和十三年七月十五日發行

編輯人 新井田 貢
東京市中野區江古田二ノ五四八

印刷人 内山和三郎
東京市澁谷區幡ヶ谷町管線一、一九六

發行所 東京市麴町區九段一丁目五番地
帝國在郷軍人會本部



終

